

進化宣言

ティモシー・レアリー

有機的進化の過程において、過去の世代との生理的、病理的関連を解消する、突然変異の過程が来ることは明白であり、それは必然的に、他の生物の中にあつて、異質な、等位な場を占めることに向かう。種の調和をおもんばかるものとして、ここに我々はその突然異変の理由を連ねる。

以下の真実を自明のこととする。

- 一、全ての種は異相に、しかし等しく創られている。
- 二、全ての種は、それぞれ不可侵の、個有の権利を有する。
- 三、それは、生存の自由、生長の自由、各自の型に従った幸福追求の自由である。
- 四、天与の諸権利擁護のため、社会機構は現出するが、その権威の基盤は運命への愛と、種々相の生の尊重にある。

五、いついかなる時にも、その統治が、生存、自由、調和の脅威となるとき、突然変異し、ドロップアウトし、新しい組織を、安全、幸福、調和に基礎を置き再構成するのは、若き種の世代の義務である。

確かに世代の智慧は、永く続いた組織を、さ細な事由により、放棄してはならぬ、と説く。突然変異の恍惚は、痛苦に仕返しされる。故に全ての経験は、既成の秩序を放てきするよりは、耐え忍ぶことを教える。

しかし、抑圧と、搾取の長き鎖が、全て破壊に向かって推進せられる時、有機的生の芯をも脅やかし、惑星の調和を乱す時、病的契約から離脱し、慈愛ある構成に自ら向かうは、権利であり、義務である。かくのごときが、自由を愛するものの苦

スティープ・ガスキン語録



生について

我われは互いに支え合うために、信頼し合えなくてはならない。そのため、何事にもまず先に直面すること。簡素に、正直にやっていたらそれが自分というものになるだろう。素直に分け合うこと。他人との関わり合いに良い気分ですること。すると他人も気持ちよくしてやれる。

覚醒剤について

みんな充分な敬意を覚醒剤に対して払っていないようだ。使うときには自分で自然な状態におくこと。人工的なものは使わないか、使うとしても手造りのものにするこ。自然のなりゆきに任せる。そうすれば

しみであった。そしてここに、我々は新たな秩序を創る必要に迫られているのである。

今地球を支配する、悪意ある白い人種の創った歴史は、弱きもの、優しきもの、若きもの、色の違うもの、異質なものに対する、物質的専制をくだてる、暴虐の歴史であった。このあかしのため、次のことの判断を後に来るものに委ねよう。

- 一、これら白い老人達は、空の生、水の生、地の生に対して、数限りない暴行を犯し、地表には鉄やコンクリートのカーペットを張りめぐらした。
- 一、彼等は常に自分達の間で争い、色の違うもの、自由を愛するもの、若者を常にしいたげ続けてきた。
- 一、彼等は、人工的な不足状況を創り出し、平和に地を継ぐべき者達の自然の資産を拒否した。
- 一、彼等は、物質価値のみ称揚し、精神を下落させた。
- 一、彼等は、個人的所有権を楯に、優しき者たちの地の道をはく奪した。
- 一、彼等は、欲に任せて境を設け、関税を

かけ、人々の自由な通行を拒否した。

- 一、彼等は、支配欲に任せて、義務教育制度を設け、子供の柔かな心をいためつけ、智慧と無垢を強奪した。
- 一、彼等は、権力欲に任せて、全ての通信機関を独占し、自由な思想の交換をさまたげ、優しき者達の愛の交歓も強奪した。
- 一、彼等は、恐怖に任せて、秘密警察を組織し、おだやかなる者達の個人生活を監視した。
- 一、彼等は、怒りに任せて、他の国に戦争をしかけ、なごやかな若者達を狩り立てて、戦場に向かわせた。
- 一、彼等は、欲に任せて、武器の製造と販売を、経済の中核とした。
- 一、彼等は、利益のために、空気、水、海を汚した。
- 一、彼等はインポの故に、殺人、暴力、不自然な性を、マスメディアにもち上げた。
- 一、彼等は、ことある毎に、ロボットの画一性を押しつけ、多様性、個性、独立性を奪った。
- 一、彼等は、不法捜査、不法逮捕を行ない、個人の尊厳を犯した。
- 一、彼等は、欲に任せて、有害食品を押し

決してあざむいたり、罰を加えたりしない。

アメリカについて

この社会には妙なことが行なわれている。わざわざスピードの速い車に乗ってエネルギーを振り落とし、共感の力をなくしている。アルコールやタバコを体内に入れて、気をめいらせ共感の力をなくし、そのかわり、一五〇〇馬力で遊び回る力を得ている。

徴兵について

軍隊には入らないこと。あんまり妥協しすぎではないけない。細かいことは問題ではない。とにかく軍隊には行かないこと。徴兵に関して言うべきことはこれだけだ。

法律について

正しくあつかえば、法律は我われを牢屋に入れようとしているわけではない。法律は単に外枠だ。本当のことというのはかけひきに含まれる人間の関係だ。この人間の関係が破壊され、だれも他人がわからなくなったときに、法律がものをいう。法律は社会が合意の上で何かしようというものだ。結局、それに対しては正直に対面することだ。

肉食について

肉を食べざるをえないか、米を煮ざるを

つけ、そして心豊かにする薬に対しては、残忍な厳罰をもつてのぞんだ。

一、彼等は決して失敗を認めない。常に欲と戦いの価値を説く。口を開けば、自己正当化とデマゴギーのみ聞かせた。

故に

——彼等は退屈極まりない。

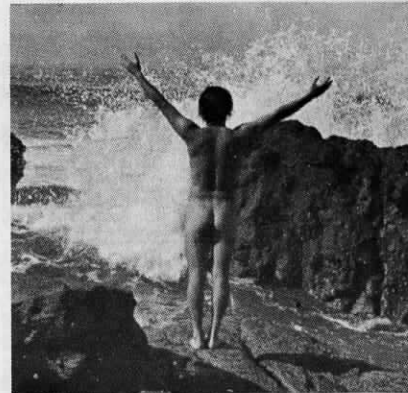
——彼等は美を憎む。

——彼等は性を憎む。

——彼等は生を憎む。

時に応じて我々は、彼等の非と盲目を警告した。機会のあるたびに、正義の頹廃を訴えた。笑わせようと試みた。彼等の行動の恐ろしさを予言した。しかし彼等は、貧乏人の泣き叫びにも、有色人の激怒にも、若者の風刺にも、詩人の警鐘にも、全てつらばであった。彼等は金と力しか信じていない。それならば、我々もはや今までの言葉で語るのを止めよう。

故に、我々、運命を愛し、平和を愛し、



生を愛し、喜びを愛する者達は、ここに宇宙の最高責任者に対し、この地に、和やかに棲息し、進化せんとするもの、全ての名において、我々は、自由であり、自立することを厳粛に宣言する。そしてまた、アメリカ合衆国臣民としての誓言は、全てここに撤棄する。我々は、同心のものと集団を組み、この地表に棲息する権利を要求する。我々自身の手と身体で、衣食住を満たし、我々に神聖と思われることを行なう。そして同時に、他のものの権利を、我々のと同じに尊重することを、ここに誓う。

えないかという業の選択については、殺して肉も食べたし、煮て米も食べたが、米の方がぼくには調和していると思う。

暴力について

暴力はぜんぜん必然的ではない。暴力は不必要だ。

ベトナムについて

解放戦線のやったことというのは、自分たちの国を荒らしたことだけだ。その戦争は巨大な利害関係を持つ集団のあいだの小ぜりあいにはすぎない。ベトナムはアメリカと共産主義陣営のあいだで、半々に犯されてきたと思う。

平和について

自分を平和にするどんなことでも、思いつくことは、たとえバカみたいなことでもやってみること。平和をもたらし唯一の方法は自分たちが平和でいることだ。

女性解放について

我われのグループの女性には自分たちの受持ちをやっている。知っていればバスの運転でも何でもする。やわらかい部分も残しておきたいので、オイル交換はぼくがする。もっともそれは女房とぼくのあいだのことだ。

特集・コミュニティの基礎

どこに逃げようか

ギル・ジョンソン

ギル・ジョンソンはオレゴン州の大学都市ユージーンにありさまについて、次のように考察をめぐらしている。

……しかし、頭のいい連中、実際初期の連中はほとんどサンフランシスコのハイト・アシユベリーや街を本当に悪くなる前にはなしてしまっただろう。ちょうど、以前のビートニクが北海岸を去ったように。今度、連中は自然にもどったが、ほんの少しの間だ。そこで朝から晩までの仕事のきついこと、聖有機農業、聖有機家族のこちゃこちゃ、聖有機馬糞、聖ホール・アース・カタログ（注：生活技術、知識、インフォメーションを集大成した本。アメリカ、カナダ、イギリスなどで

発行され、コミュニティ志向の若者などの間で利用されている生活百科全書的な大部なものである。）が自分たちのものではないことに気が付いた。つまり、「ときにはマクドナルドハンバーガーやフライがどうしていけないんだい」というわけで、西部の平和で、リベラルな大学都市にもぐりこんできた。このときまでは、すでにかれらはヒッピーではなく、強力な反体制文化に成長していた。すべての可能性を持っていた。

ぼくのいるユージーンについて言うと、過去四年間、多くの連中が逃げこんで来た。千人もいるだろうか。七万九千の人口の町にしては巨大なフリーク（意識的脱落者）人口を

かかえたものだ。ユージーンについて評判が広まったのだ。一カ所に二カ月といたことのないようなフリークたちがユージーンに来て出てゆかない。数えきれないほどのコミュニティがまわりを囲んでいる。だれでも好きなクスの植物を栽培している。パークレーミタに政治性が強い。それに、まともな街の連中まで友好的だときている。大きすぎも小さすぎもしない街だ。

尾ひれのついたこれらの話のいくつかは本当だが、いくつかはまったくの嘘っぱちだ。それに一〇月から六月までは毎日といっていいくらいに雨が降る。それ以上にゆううつなのは、今のところ小さくて、関係ないかもしれないが、心配になる種々なしがあることだ。ユージージはフリーク人口の激増に悩むだろうということ。フリーク・ゲッターがもうすでに発生しはじめていて、一角、一角とアミーバーのように増殖しはじめていることだ。

マフィアがクスの商売をユージーンに持ちこもうとしていることとか、ユージーンには少なくとも二〇〇人以上のアヘン中毒者がいることが知られている。

大学生のよくいく飲食街に、奇妙に敵意に

みちたの様子をしたゴロツキ、暴力団など、以前見たことのないようなグループが出没しはじめた。そうしたところで口げんかや、ナイフの争いごとが突然起こるようになった。理由の見当もつかない袋だたきや殺しが、街の西側でしょっちゅう起こる。

ティモシー・レアリー（『進化宣言』の起草者）は死んだ。今ではだれでも知っている。見殺しにしてしまった。かれは警察に、それが連邦、州、地方警察であれ、やつらに殺されたわけではない。ブラックパンサーやウェザーマンに殺されたわけではない。沈黙の大衆に殺されたのではない。そんなことのずつと前から死んでいたのだ。

おれたちが殺した。

現実への麻酔としてのクスリで、手軽に早くとメスカリンで、とにかく、ありとあらゆる種類の化学的感覚錯乱剤を当初の目的とはぜんぜん違ったことに使って、かれを殺してしまった。ハイト・アシユベリーで、イースト・ビレジで、コロラドで殺し、ニューメキシコの貧相なヤマヨモギの中に葬った。墓石

達せるとしたら、墮落と暗黒もある種のクスリによって達せられても良いわけだ。

ティモシーの生の祭典の反対はなにか。死の祭典か。

ティモシーはおれたちの意識を置き換えることには成功した。しかし、本当におれたちを変えたわけではなかった。おれたちは違った生きざま（ライフ・スタイル）で生きることとはできる。だが、おれたちに重要なのは、ま（スタイル）の方なのだ。こうして、例の反文化というやつは、自分の拒否する社会の汚点を受けついだ罪がある。かれからおれたちは「自分のことをやれ」と教えられた。しばらくはおれたちの何人かはそうした。そのうちにそれがだんだん寄りかかりになってきた。自分のことをやるということは、努力やコミットメントが少しでもいることに巻き込まれないということになった。つまり、社会からの離脱だけでなく、社会的連関のすべてからの脱落を意味した。クスリの七色ガラスの壁の背後に自分とじこめることを意味した。

おれたちの知ったことじゃなかった。おれたち自身のことをやらせまいとする連中がま

もなく、思い出したようにかれの愛した詩人のうたをくちさんだり、「まあ、かれはかれで……」となくさめたりしている。

かれは少しづつ切り刻まれて、いたいたしくゼイゼイ言い、すがりつきながら、まるで地獄が待つてでもいるかのように死んでいった。高校生のガキ共に洗剤をクスリとおれたちが売りつけはじめたころ、ティモシーは少しずれた。狂酔してランキ騒ぎをしているうちに、ますますかれの場所はなくなつた。おれたちが女房を次の食事のために外に突き出して稼がせるようになったときに、かれはちようど息をひきとった。

（8月8日、ティモシー・レアリーが世界覚醒剤ラリーを開き逮捕されたことがラジオで報ぜられた。——注・訳者）

死んで良かったのかもしれない。だれにも知られずに。クスリの論理に殉教者は無用だ。かれは、大文字絶対の愛と平和と光明を説いた。かれは後生大事に、とんでもないことに救いを説いた。当然、かれの宗教、ユートピアは弁証法的なままとを射そねた。エデンの園は反エデンとでもいうものなしには存在できない。悪を通してのみ善を感じし、苦痛を

通してのみよろこびを知ることができる。一九世紀の問題は経済だった。マルクス・社会主義者は資本主義的抑圧の鎖を断ち切る革命を説いた。しかし労働者は、隷属状態を認識すべきであつたにもかかわらず、ほとんどはそうしなかった。革命の力は予期できないほどの反作用を持っていた。そして、資本主義を多少なりと強化、持続させている。

天国は地獄を前提とする。だが、地上には、生物世界にはそんなものはない。人類は一生を通じて双方を知るように宿命づけられている。あるいはそうする特権を持っていると言つてよからう。呪いと祝福を全宇宙の部分として、ほんの部分的に知るように運命づけられている。前進的な一歩——たとえば進歩、正義、解放、救いと名づけられたもの——がこの地上で行なわれると、反対方向への一歩——汚染、道徳的頹廢、無秩序、全体主義と銘うたれたこと——を同時に生み出しているのではないかと思える。だから、ティモシー・レアリーの革命も、マーチン・ルーサー・キングや、マルクスや、フロイトや、他のだれのものにもしろ失敗するのは当然だった。コインの裏側のあることを理解しなかったからだ。つまり、ある種のクスリで救い、光明に

わりには居たが、ほんの少しの者しかそれと闘わなかった。ほとんどは回避しただけだった。ときには一カ所に自分自身のトリップをするフリークが多すぎてけんかになった。そ

こでおれたちは、そこからも逃げた。もうこれ以上逃げつづけることはできない。行く場所もなくなってきた……。

月刊キブツ在庫いちらん表

●注文のさいは、定価と送料を切手あるいは現金で、何年何月と明記のうえ送って下さい。

71年2月号	特集・第2回共同体話合いの会報告	定価一〇〇	〒16
71年3月号	特集・社会思想史からみたユートピア共同体	定価一〇〇	〒16
71年5月号	特集・社会福祉における胎動	定価一〇〇	〒16
71年6月号	特集・共同体を求めて	定価一〇〇	〒16
71年9月号	ボクたちにとって「へき地」とは何か／牛・人間・革命	一〇〇	〒16
71年10月号	特集・アメリカコミュニケーション群像	定価一〇〇	〒16
71年12月号	特集・大地の思想家A・D・	定価一〇〇	〒16
72年2月号	特集・「中央」から離れて	定価一五〇	〒16
72年3月号	特集・キブツへの探求／揺らぐわたしたち	定価一五〇	〒16
72年4月号	特集・我々はなぜキブツへ行くのか？	定価一五〇	〒16
72年5月号	特集・ユートピア	定価一五〇	〒16
72年6月号	特集・都市共同体	定価一五〇	〒16
72年7月号	特集・さて、どう生きようか？	定価一五〇	〒16
72年8月号	特集・近代文明からの解放——インドの運動	定価一五〇	〒16

部

族

宣

言



ぼくらは宣言しよう。この国家社会という殻の内にぼくらは、いま一つの、国家とは全く異った相を支えとした社会を形作りつつある、と。統治する或いは統治されるいかなる個人も機関もない、いや、統治」という言葉すら何の用もなきない社会。土から生まれ土の上に何を建てるわけでもなくただ土と共に在り土に帰っていく社会、魂の呼吸そのものである愛と自由と智慧による一人一人の結びつきが支えている社会——ぼくらは部族社会と呼ぶ。アメリカ、ヨーロッパ、日本、その他の国々の若い世代によって、何百万人という若い世代の参加によって静かにあくまでも静かにしかし確実に多くの部族社会が形作られつつある。都会に或いは山の中に農村に海辺に島に。



ぼくらは勧告しよう、世界中のあらゆる人々に、部族の結成及び部族への参加を。具体的には、それは個人ごと家族ごとに分離している生活の営みの放棄、国家社会における家族及び労働、教育の場からの国家的な思惟からの離脱を前提とし、またそれは、金・土地家屋・作業道具・教育・医療

・研究・図書・交通機関・生産・販売・買入機構そして一切の労働と消費に対する私有の放棄を意味する。それらをぼくらは全て部族にあずけよう。彼はぼくらみんなのハートと智慧を溶けあわせた偉大な人格であり、と同時にぼくらの仲間だ。ぼくらと彼との間には、愛する者と愛される者の関係があるのみなのだから。



ぼくらがもつとつと広い視野宇宙的なともいべき視野と自我の奥底からの知恵の輝きを以て見るなら、全宇宙が至高の自我——一人の生命全体を以て遂行していくゲームであり、社会はそのための場だ。ここではぼくらは遊びの内にあり、ぼくらが遊びの主人なのだ。そしてぼくら一人一人が、各自の内面の深みに、いかなる論理

や倫理をも踏み越えつき進んでいく所に果すべき務めがある。それは解脱、或は自覚、或は実現と呼ばれている。それはまたこう告げられている、この務めは各自の限りないほどの人間或いは他の生命への生まれ変わりによって果し終えられる。これは彼

——至高の自我——神のリーラー（戯れ）

なのだ。この務めを果すため敢然とたった一人で人里離れた所に食もいかなる肉体的な安楽をも断ち、ただ坐り続け内面の深みに下り続ける道もあるが、今ぼくらは生活というゲームをなしながらこの務めを果す道を、そして部族社会というこのゲー



ムの場を選んだのだ。ただルールが、それぞれを支えている力が相違するにすぎないのなら、いずれゲームの場にすぎないのなら、何故国家社会ではなく部族社会を選ぶのか？

ぼくらはあくまでも一人一人の自覚、或いは解脱、或いは実現を主におくからだ。全宇宙は神——ハリの現われ或いは戯れであり、ぼくら一人一人が神——ハリだという真理の上にぼくらはこのゲームを部族社会を形作っていく。ここでは生活というゲー



ームをなしていくに一人できりきりまいし結局はルールによって支配され、ゲームを務めととり違え、全く真の務めを見失ってしまう事態はほとんどあり得なくなるから。ここではお互いの愛と自由と智慧の内に、内面における時間の流れのほとんど決定的な連続が各自の内に保たれ、ぼくらはまっしぐらに各自の内面深くおりていく。ゲームの内面にただから廻りしていくだけの愚かな状態は、ぼくらの誰からも消え去ってしまうだろう。人類は生き残るべき道を、一人一人の自己は無限の自己への道を見出すだろう。

■ 天地報道 ■

君に知らせたい。

じつにながく歩いたのちわたしは着いたのだが、辿り着いたという感じはしていなかった、むしろ道程の半ばを越したろうかというところだった。地を駆ける者は常にこうなのだ。目的地とは呼んでもそれはいわば飯の道標で、どこへ行っても到着するや否やもう少し遠くの方を見てしまふ、おそらく、地図の上だけを歩き回る旅人や、田畑を守りぬくことと生を閉じる農夫には解らない心の動きだろう。……同書P7より。

鳥書房発行 定価七五〇円

世田谷区南鳥山四一五—八

03—300—5376

——青野聡(著)——

部族社会は、まさに夜明けの太陽のごとく全地上にあまねく光を投げかける。国家社会の下に息絶え絶えに生活している他の人類に対していく度もいく度もぼくらの内面の呼吸を、大地の呼吸、魂の呼吸をとり戻させるべく。大地に帰れ！と、そして自らの内に大地の呼吸をとり戻せ！と。

(四〇〇六七年十二月)